HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	アイヌ考古学の歩みとこれから
Author(s)	佐藤, 孝雄
Relation	アイヌ研究の現在と未来：第1部. 平成20年6月29日. 札幌市
Issue Date	2008-06-29
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/34406
Type	lecture
File Information	28-2.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

アイヌ考古学の歩みとこれから

佐藤孝雄

(慶應義塾大学文学部)

構成

Ⅰ. はじめに

Ⅱ. 渡辺仁の研究とアイヌ考古学の発展

(1)「土俗考古学」

(2)「クマ祭文化複合体」

(3)「アイヌ・エコシステム」

Ⅲ. 渡辺のパラダイムに対する批判

(1) 渡辺にとっての「アイヌ文化」

(2) 渡辺モデルに対する見直し

Ⅳ. 考古学者が語るアイヌ史、アイヌ像の変化

(1)「歴史性」の重視と「原始性」の否定

(2) 広がりつつある文化観・歴史観の齟齬

Ⅴ. 島松沢の岩屋での民族考古学的調査

(1) 調査を通じて得た知見

(2) 漁川源流域における交錯と共感

Ⅵ. むすびにかえて

要旨

アイヌ考古学については、これまで幾人かの研究者がその歩みを振り返り、展望ものべてきた(e.g.天野 1995, 宇田川 2000, 越田 1988, 鈴木 1994, 藤本 1984)。彼らも含め、アイヌ考古学に取り組む研究者の多くが、故渡辺仁の方法論や作業仮説(モデル)から多大な影響を受けてきたことは、誰もが認めるところであろう。しかしながら、この渡辺のパラダイムに対しては、既に幾人かの研究者達により見直しや転換の必要性も説かれ (e.g. 天野 1995, 深沢 1995, 瀬川 2005, 2007)、それに伴い、考古学者達によるアイヌ史の語り口にも、少なからぬ変化が生じるに至っている。

今日、「修正主義者」の見地に立つ考古学者は、純粋かつ不変的なアイヌ社会など虚構にすぎないと考え、むしろその変化、混淆、複雑性を強調するなか、新たなアイヌ史を語るようになった。その結果、考古学者が語るアイヌ史・アイヌ像と、長年アイヌ自身が語り継いできたそれとには、無視できない齟齬も生じている。わけてもウタリ協会会員が好んで語ってこられたようにおもえる「原始性」、エコロジカルな暮らし方、和人との対立構造などについて、既に考古学者の多くは無条件に容認しがたく感じているのが実情だろう。

もとより歴史の「構築性」、「多声性」をただ説いていられる立場なら、そうした齟齬を解消・縮減する必要性など、さほど感じなくてすむかもしれない。しかしながら、アイヌの方々が暮らす場所に長期滞在するなか、発掘調査をはじめとするフィールドワークを実施し、ときに遺跡の保全にも関わる考古学者にとって、この問題を放置することは、自らの調査・研究や社会活動に支障を来すことにもつながりかねない。歴史観・文化観の齟齬が大きくなれば、アイヌには必然的に、考古学者が発掘する遺跡やその成果をもとに紡がれる歴史は「一体誰のためのものか」という疑問が膨らむこととなろう。さらにそれが高ずれば、調査・研究活動に対する理解と協力が得られなくなり、遺跡の保全すらままならぬ事態に陥ることも想像に難くない。

いみじくも瀬川拓郎も説くように、新たな視点で歴史が語られるなかときに忘れがちにみえるのは、私た

ちの前にアイヌとして生きようとし、また生きてゆかなければならない人々が存在するという現実だ(瀬川2007:258)。今なおいわれ無き差別と偏見のなかにも置かれている彼ら。彼らはなぜ私たちではないのか。彼らの歴史はなぜ私たちの歴史と違うのか。そのことを共に考えるために、和人である考古学者はこれまで以上にアイヌとの対話を重ねる必要があるだろうし、発掘調査などのフィールドワークも努めてその機会とすべきであろう。

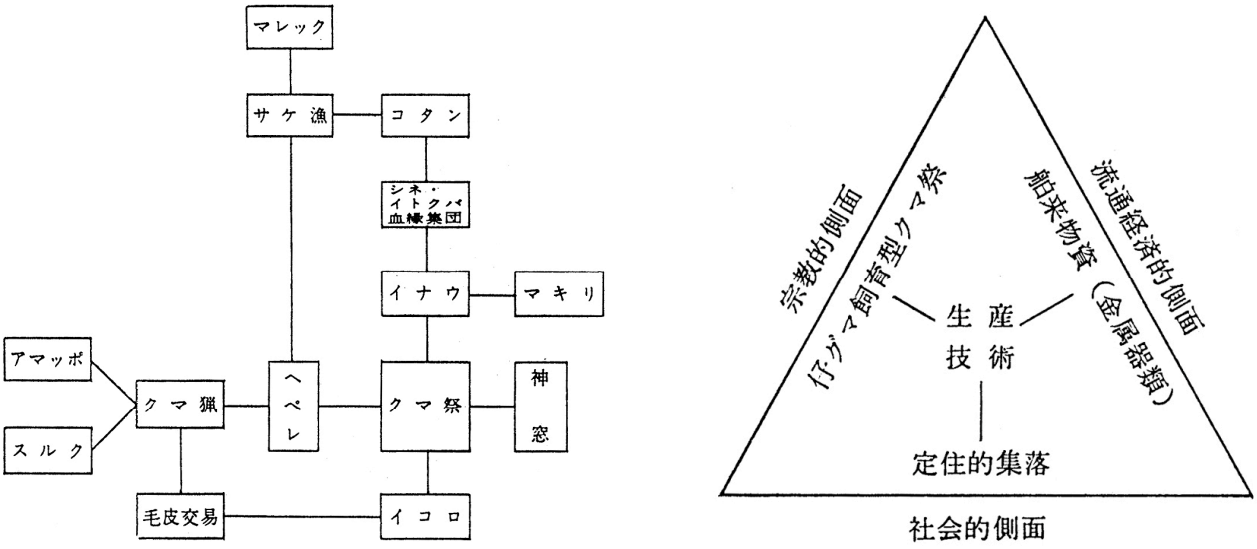


図１ アイヌのクマ祭文化複合体とその３側面(渡辺 1972)

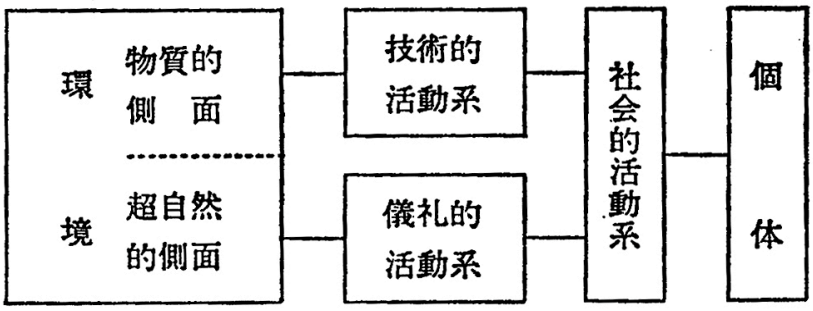


図２　アイヌ・エコシステムの基本構造(渡辺 1977)

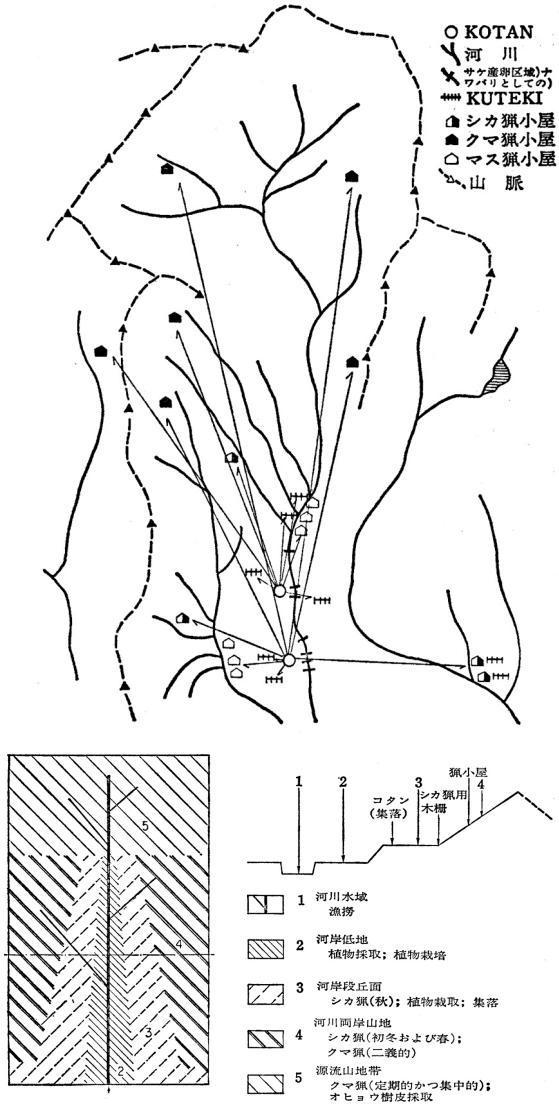
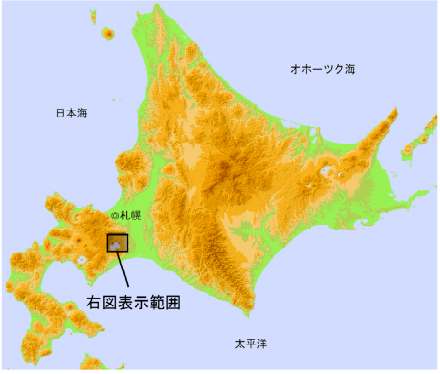


図３　近世のアイヌ・エコシステム：
十勝川上流地域の例（渡辺 1977）

図４　上川盆地におけるサケの遡上河川・
産卵場・遺跡の分布（瀬川 2007）



支笏湖周辺および漁川源流域に確認されている“熊送り場”跡の位置を，国土地理院発行２万５千分１地形図(「空沼岳」,「恵庭岳」,「支笏湖温泉」,「風不死岳」,「樽前山」)上に示した．漁川源流域に示した５つの岩屋のうちエンクラの岩屋については，林道敷設に伴い破壊され，今日その姿をとどめていない．なお，右図に示した地形図の範囲は，およそ上図の網掛け部分に相当する．上図については国土地理院発行「数値地図250mメッシュ(標高)」をもとに作成した．

図５ クマ送り場に利用されたシラッチセ(岩屋)群の位置

文献

天野哲也

1986 恵庭市漁川のクマ送り場．大井晴男(編)，環太平洋北部地域における狩猟獣の捕獲・配分・儀礼．昭和 60 年度科学研究費補助金(一般A)研究成果報告書, pp.44-68.

1995 アイヌ文化の形成–現状と課題–．展望考古学, pp.232-239．岡山：考古学研究会.

宇田川洋

1978 虹別シュワンの熊送り場跡．どるめん 16: 133-143.

1980 アイヌ考古学．東京：教育社

1988 アイヌ文化成立史．札幌：北海道出版企画センター.

2000 増補アイヌ考古学．札幌：北海道出版企画センター.

2001 アイヌ考古学研究・序論．札幌：北海道出版企画センター.

宇田川洋(編)

2004 クマとフクロウのイオマンテ–アイヌの民族考古学–．東京：同成社.

池谷和信

1996 「伝統主義者」と「修正主義者」とのあいだの論争をめぐって–カラハリ・サン研究の事例–．民博通信 73:64-77.

小川英文

1998 考古学者が提示する狩猟採集社会イメージ．民族学研究 63(2): 192-201.

駒井和愛

1961 アイヌ考古學の現況. 学燈 6: 7-10.

上屋真一

1984 熊送り場所在確認調査報告書(三股の岩屋・金山沢の岩屋). 恵庭: 恵庭市教育委員会.

越田賢一郎

1988 北海道における中・近世考古学の現状と課題. 物質文化 50: 51-64.

佐藤孝雄

2007 ユクエピラチャシ跡の脊椎動物遺体. 大鳥居仁(編), 史跡ユクエピラチャシ跡−平成 14〜16 年度発掘調査報告書−, pp. 203-244. 帯広: 陸別町教育委員会.

佐藤孝雄(編)

2006 シラッチセの民族考古学−漁川源流域におけるヒグマ猟と“送り”儀礼に関する調査・研究−. 東京: 六一書房.

鈴木信

1994 中世・近世, 北海道考古学 30: 55-66.

瀬川拓郎

2005 アイヌ・エコシステムの考古学. 札幌: 北海道出版企画センター.

2007 アイヌの歴史−海と宝のノマド−. 東京: 講談社.

谷本晃久

2001 近世蝦夷地「場所」共同体をめぐって. 学習院史学 39: 4-18.

2002 宗教からみる近世蝦夷在地社会. 歴史評論 629: 48-59, 72.

田村俊之(編)

1984 千歳市美笛における埋蔵文化財調査. 札幌: 千歳市教育委員会.

手塚薫

2005 近世におけるアイヌの生活様式の多様性−アイヌ研究の新たな展開−. 池谷和信・長谷川政美(編), 日本の狩猟採集文化−野生動物とともに生きる−, pp. 100-149. 京都: 世界思想社.

深沢百合子

1995 エスノヒストリー(ethnohistory)としてのアイヌ考古学. 北海道考古学 31: 271-290.

渡辺仁

1972a 先史考古学・生態学・ethnoarchaeology (方法論について). 考古学ジャーナル 72: 1・23.

1972b アイヌ文化の成立−民族・歴史・考古諸学の合流点. 考古学雑誌 58(3): 47-64.

1977 アイヌの生態系. 渡辺仁(編), 人類学講座 12 巻 生態, pp.384-405. 東京: 雄山閣.

1990 縄文式階層化社会. 東京: 六興出版.

1993 土俗考古学の勧め−考古学者の戦略的手段として−. 古代文化 45(11): 1-14.

Watanabe H.

1964 The Ainu: A Study of Ecology and the System of Social Solidarity between Man and Nature in Relation to Group Structure. *Journal of the Faculty of Science, University of Tokyo*, Sec. V, Vol. II, Pt.6. (Revised Edition, *The Ainu Ecosystem: Environment and Group Structure*. Tokyo: University of Tokyo Press.)